

Keeper TOM'S RC F 開幕戦優勝!!

4月4日〜5日、岡山県美作市の岡山国際サーキットにおいて、2015年スーパーバードGTシリーズの開幕戦となる第1戦「OKAYAMA GT 300 KM RACE」が開催された。



公式練習

4月4日午前9時、あいにく岡山サーキットは厚い雲に覆われ、路面はまだ濡れている中で開幕戦の公式練習が始まった。開幕戦は、ノーハンドキャップ、のガチンコ勝負である。各チームとも、今年のシリーズをどのような状態で戦うか、非常に重要な鍵を握る一戦でもある。

Keeper TOLとホワイトカラーの37号車Keeper TOM'S RC Fはシグナルがブルーに変わると早々とコースインしてコンディションを探る。まず乗り込んだのはアンドレア・カルダレッリ選手。ゆっくりとゆっくりと、まるでマシンとコースの相性を探るかのように滑り出し、タイヤを温めながらマシンの状態を確認していく。状態は良好である。他のEXUS勢と同様、毎周のように好タイムを刻みながら、マシンを天候、サーキットの状況に合わせてためにピットイン、ピットアウトを繰り返す。

路面も徐々にではあるが乾き始める。23周をアンドレア・カルダレッリが予選に向けたマシンのセットアップに専念。そして今年より#37 Keeper TOM'S RC Fのレギュラードライバーとなった若千21歳の平川亮選手にドライヴを交代。タイヤが十分に温まった8周目に1分20秒251のタイムをマーク。マシンの状況が良いことを確認し、午後に行われる予選に向けて準備に入る。

予選

15時10分、予選1は若いながらもスーパーGT 4年目を迎えたアンドレア・カルダレッリがステアリングを握りコースイン。4番手ながら難なく予選1を通過。30分のインターバルを置いて行われた予選2は、昨年、同じTOM'SからスーパーバードGTデビューを果たしているものの、レギュラードライバーとなったばかりの平川亮がステアリングを握ってコースイン。

タイヤを十分に温めた4周目、平川亮は岡山国際サーキットのコースレコード1分19秒404を上回る1分19秒008という驚異的なタイムを叩き出し、なおもアタックを続けるもののピットから「タイヤを労わるためにアタック中止」の指令が出される。当然トップタイムである。他のマシンのタイムを注視するものの、タイムは伸びていかない。平川亮、してやったり。レギュラードライバーデビューの平川亮が何とポールポジションを獲得したのである。

決勝

今日も朝から降ったり止んだり雨模様の中、14時33分過ぎ、いよいよ開幕戦第1戦82周のレースはスタートが切られた。スタートドライバーはアンドレア・カルダレッリ。アンドレアはポールポジションの強みを活かして快調な走行を続け、9周目には2番手となっていた1号車 NISSAN GT-Rを5秒21も離して快走を続けるものの、雨が上り徐々に乾き始め、生乾きの路面に強いミシユランタイヤを履く1号車は周回毎にタイム差を縮めながら追いついてくる。17周目、1号車に交わされて2番手となってしまふ。しかし、22周目、1号車にマシントラ

ブルが発生して急激にスピードダウン。#37 Keeper TOM'S RC Fは再びトップに振り返り、15号車と100号車のHonda NSXが迫っている。乾き始めた路面ではNSX勢も速く、24周目15号車に、25周目100号車に交わされ3番手まで順位を下すこととなってしまふ。



ゴール直後、トップを走る平川亮をモニターで見つめるアンドレア。トップを獲る時はこの格好がラッキーポジション

予選

レースの中盤に差し掛かった40周目前後から各マシンのピットインが始まり、ドライバー交代、タイヤ交換、給油を終えていよいよ後半に入る。#37 Keeper TOM'S RC Fは41周終了時点でピットイン。アンドレア・カルダレッリから平川亮にバトンタッチ。平川亮は5番手でコースに復帰するものの追いついてくる100号車の前でコースイン。実質のトップである。しかし、NSX勢は乾き始めた路面での速さが際立っており、48周目、100号車に交わされ2番手となる。そのタイム差も徐々に開きつつある。このままレースは終わってしまうのか。ピット内にも重い空気が流れ始めたかと思いきや雨が降り始め、路面が完全に濡れてきた。100号車とのタイム差が徐々に詰まっていく。100号車はマシンがふらつき始めている。70周目、Keeper TOM'S RC Fが100号車を交わして再びトップに躍り出る。100号車とのタイム差は開く一方である。77周終了時点で24秒78、残り3周となる79周目には39秒35まで開く。ピットから「平川、無理するな。タイム差があるからスピードを落とせ」という指示があるにもかかわらず、平川は手を緩めることなく責め続け、2位100号車に何と42秒もの大差をつけて優勝のチェックカーフラッグを受けた。

#37 Keeper TOM'S RC Fは2年連続開幕戦優勝。若千21歳の平川亮にとってはもちろんスーパードライヴ初優勝であると同時に、ポールポジションを飾った。岡山国際サーキットスーパーバードGTコースレコード樹立、ポールポジションの獲得、スーパーバードレギュラードライバーデビュー優勝、見事である。ここに新たなヒーローが誕生し、平川亮は歴史に名を刻んだ。

「亮は天才ではありません。努力家です。寡黙で人と話すのが嫌いな子どもが、13歳でレーシングカートに出会い、唯一コミュニケーションをとったのは、タイヤを介しての路面。それからは毎週末、朝から日没まで、暗くなって前が見えなくなるのが、大雨が降ろうが、しまいに積もった雪を一緒に歩いて走行できるようにして……それも全てスリックタイヤで。その時は気付きませんでした。カートと一体になって路面と会話していたのでしょね。好きに走らせてくれるカート場があったことに感謝しています。」

COLUMN

毎日、いつも、決めたことを人並み外れて実行する。

スターであるレーシングドライバーは華やかな部分が目立ち、地味な努力とは縁がなさそうに見えるが、彼らは自分に厳しく、自身の肉体と神経を日々鍛え上げている。若手のスーパーバードキー平川亮。彼は天才だと私は思う。しかし彼の父親である平川晃氏は私に通のメールを送ってくれた。

「亮は天才ではありません。努力家です。寡黙で人と話すのが嫌いな子どもが、13歳でレーシングカートに出会い、唯一コミュニケーションをとったのは、タイヤを介しての路面。それからは毎週末、朝から日没まで、暗くなって前が見えなくなるのが、大雨が降ろうが、しまいに積もった雪を一緒に歩いて走行できるようにして……それも全てスリックタイヤで。その時は気付きませんでした。カートと一体になって路面と会話していたのでしょね。好きに走らせてくれるカート場があったことに感謝しています。」

これが滑りやすい路面を得意とする亮の原点なのだ。後に、F1ドライバーになりたいという夢を抱いてからは準備の日々だった。ハンドルに全ての機能が付いている近年の車に対応するために、両指のトレーニング。箸は左手、常にルビックキューブで指の運動。F1のコースを覚えるためグランドツーリスモクラウド。周囲は笑った。だが本人は本気だ。18才でアチーブメントの研修を受け、人生の目的目標設定が鮮明になり、日々の努力もより現実味に添ったものになった。

▼わたしの夢は(A)です。
▼(A)のためには(B)しなければなりません。
▼(B)をするには、(C)が必要です。

自分の目標を実現するために、目標を実現できる肉体と技術を身につけなければならない。そのため決めるべき行動を決め、やるべきスケジュールを決めて、毎日それを実行する。これが「努力」というもので、この努力が並はずれたレベルにいくと自分の夢や目標が必ず抜けた形で実現するのだ。たとえ夢が大きすぎて、少々ずれていても、ひよっとすると自分が望んでいたよりも大きく実現するかもしれない。天性としての才能の差なんて大してないのだ。



平川亮のヘルメットは、世界制覇をする気が、まるっと地球儀。ドライバー交代でコースに出ていく前